徒然異世界紀行集

源北

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

頭の中で練った世界設定を舞台とした話を書きたい

→やってみたけど、キャラやストーリーが浮かばない…

→せや、Ｓ■Ｐや日誌みたいにしたらええんちゃうか

という思いつきで書いた、異世界を渡る男の記録集「風」物です

世界観設定の参考になれればいいな、と思います。

目　次

はじめの頁 ―――――――――― 1
記録：n＋2132　雲界世海 ―――――――――― 3
記録：n＋2132―1 ―――――――――― 10

はじめの頁

徒然なるままに、とは誰がいったのか。
元の世界を求めて今や幾数年。誰が書いたのかまるで思い出せないが、冒頭のそのフレーズだけは気づけばついつい口ずさむのが癖になっているナナシです。
意味は何だったのか。
たしか思いつくままに、というニュアンスだったと思う。
なので私も、その言葉に倣って元の世界に帰れるまでの間の事を、こうして書き記すことにしました。
以下、現在の私の状況などを箇条書きで記します。

・性別：男性
・氏名：不明
・年齢：不明（おそらく１９～２５くらい
・生年月日：不明
・出身：日本？（ほぼ読めない運転免許証からの推定
・現在の状況
1、地球とは違う所、異世界を漂流中。
2、自身に関することの記憶の喪失。ただし元の世界の国や言語、文化などは覚えている。
3、帰還するための手段、異世界を渡る方法・道具は確保済み。ただし渡る先の世界・時代がど
　のようなものかは完全にランダム。
4、名前が分からないので、とりあえず「ナナシ」と名乗っている。
・旅の目的
1、元の世界への帰還。
　現状では帰還確実性が怪しいのでもっとよい手段っを探索中。
2、記憶の回復。
　現在の所、回復の見込みはなし。むしろ忘れるほうが早い。
・持ち物
古い螺子巻き式の懐中時計

・最初に目覚めた世界の遺跡で発見。螺子を回すことで世界間を渡ることができた。原理は不明。

茶色い無地の革表紙の手記

：同じく遺跡で見つけた埃を被った手記。

胸ポケットに入る大きさで、これに書かれた文字は勝手に翻訳される。原理不明。

・記録方法

記録するに当たって、訪れた世界はゲームの様に固有の名前で呼ばれてるとは限らない。

なので「ｎ＋〇〇」というように番号を振当てて記録していく。

基本的に記録内容は見聞きしたもの記述するので、正確性の保証は出来ない。

・特記事項

遺跡について

「アルスヘイム」という文明が残したとされる都市遺跡の一つ

上記のような懐中時計や手記、高層ビル並みの遺構が見受けられることから相当な発展をしていた文明だったことをうかがわせる。

その一方、電気やガスなどを使っていた形跡がない。

懐中時計について

1、長短針は年月日を示している

2、異なる世界間（例：科学文明→魔法文明など）へ行くには、それなりの回数は巻き上げないといけない

3、次の世界に移動するには、巻き上げた分の日数を過ごす必要がある。

4、行先の世界・時代は完全なランダム制

5、長時間一定の場所に留まっていると、元の世界の物品や名称を見聞きしやすくなる。

特に東アジアの文化に似ている程、それは顕著に現れる。中には其まで平穏だった国が、大東亞戦争をなぞるかのように不自然に開戦して滅亡した事例もある。この事からこの懐中時計は、使用者を起点に因果の流入・改変が起きている可能性がある。

記録：ｎ＋２１３２　雲界世海

●概説

ｎ＋２１３２　は雲海と浮遊する大地世界である。

全ての陸地は雲海に浮いており、人をはじめとする動植物はその生態系を陸地の表層に築いている。

陸地の内「大陸」や「島」に分類される程の大きさは、その自重により体積の九割が雲海に沈んでいる。

眼下に広がる雲海とは別に、雨を降らす積乱雲が上空に浮かんでいる為、陸地は上下を雲で挟まれている形になっている。

その環境特性から大陸・島間の移動方法や技術が発達しており、飛行機や飛行船等の地球でも見られる飛行機械の他、浮力を起こす能力を持つ蒸気船や翼竜・鳥類等の大型生物で雲海を渡る騎獣士といった存在が確認できる。

ｎ＋２１３２の雲海には一切の隙間がなく、雲底下の様子を視認することはできない。

また雲海の内部は、表層付近から隔絶した暴風が吹き荒れ、その風速は深部に向かう程悪化している。

さらに大小様々な岩石が風に乗って飛び交っている為、一度そこに足を踏み入れた者は無事では戻れない。

赤道付近では、熱せられた気流による上昇で雲海が高く、その影響で強風が吹き荒れている。また、その霞な中を「島」にも満たない岩石群がその中を周回する光景が見られる。

宇宙空間から見れば、おそらくｎ＋２１３２　は大陸を有するガス惑星のような見た目だろうかと思う

●生物

ｎ＋２１３２で確認できた知的生物としては一般的な人間の他、獣人やエルフなどといった亜人種が確認でき、浮遊大陸や島々に点在している。

動植物は地球に現存する種と同等のものが確認できるが、異なる点

として魚類――――特に地球で海水魚と汽水魚に類する種にはトビウオのような羽が付いており、実際に雲海を泳ぐ姿が見れる。
その他、騎獣として調教されている巨鳥や翼竜などｎ＋２１３２独自の生物が確認できる。

●幻獣
人や動植物の他に、雲海で確認された存在の総称。
ニュアンスとしては宇宙人やネッシー、天狗等のＵＡＭや妖怪といったものに近い。
その他人里に被害を出すモンスターや神獣や悪魔として崇拝されるモノなど、人に凶暴な存在や超常的な力を有する者も含まれる。

●軍事・技術
ｎ＋２１３２の軍事・技術の発展度合は、その環境特性による格差はあれど概ね１８世紀から１９世紀相当。列強諸国においては２０世紀相当までの発展が見られる。
特に航空機技術については、地球のそれと比べても早いものがある。
航空機技術――――ｎ＋２１３２では造船技術になるだろうか――――の変遷としては、まず巨鳥や翼竜といった騎獣を操る騎獣士の登場。次いで軽い気体で浮揚を得る飛空船が交易の主役を担った。
産業革命が起こると内燃機関の船舶や航空機が登場し、旧来の大国を打ち負かす列強諸国の台頭を促した。

・空中軍艦
浮揚力を起こす内燃機関を搭載した軍用艦船。
それまでの飛空戦列艦では難しかった重装甲・重武装が容易にできるようになった。
炸裂弾を防ぐための装甲艦から始まり、強力な艦砲と堅牢な装甲を誇る「戦艦」遠洋航行能力・高速性などを活かした攻撃力を持つ「巡航艦」魚雷などの水雷兵装を装備した「水雷艇」などが存在する。

※海でないのに魚雷と聞くと変だがこの世界の魚は雲海を泳いでいる。

・飛空戦列艦

多数の側舷砲を装備した非装甲の飛空船。

ガレオン飛空船を起源とし、空中軍艦が登場するまでの海戦の主役を担った。

大砲の技術向上のより、その脆弱性と重装甲が難しいといった問題が浮き彫りになったことで、飛空船から蒸気船へと海戦の主力は移っていった。

・騎獣士

巨鳥や翼竜といった飛行生物の騎乗に長けた者、または職業の総称。

主に巨鳥と翼竜の二種類が主流で、その生物的違いから騎獣兵と竜騎兵の二種類分けられる。

空を飛べるという優位性と機動性から、偵察や伝令に活用された他、戦線後方への奇襲や爆撃、海戦においては敵船への切り込みなどの場面で活躍した。

その反面で高い技量が要求されることから、馬に騎乗する騎兵と比べその頭数は少ない。

1、竜騎兵

半神的、凶暴な肉食獣として幻獣に類する竜種の中で、比較的に人の手で調教できた種に騎乗する兵士。

弓矢を寄せ付けない鱗とその体躯による高い攻撃力を誇る。

竜種故にその気性は荒く運用が難しいものがあり、余程の大国でなければ竜騎兵の大量投入はできない。

2、騎獣兵

主に鳥類を騎獣に用いた兵士。

運用の難しい竜騎兵に比べ遥かに扱いやすく旋回性でも上の為、中小国ではこちらを主力とすることも多い。

しかし鳥類故に耐久性が低く、特に羽毛に引火する恐れから騎乗しながらの銃火器の使用が出来ない。
その為、主な攻撃手段として弓矢刀剣の他、空気銃などが使用される。

・航空機
地球と同様に動力と主翼による揚力で飛行する機械で、軍用機として戦闘機、爆撃機、偵察機などがある。
異なる点として、進んだ航空機技術に銃火器が追いついていない為、その武装は異なる。
具体的に言うと、ガトリング砲や斉射砲など重く取り回しの悪い機関銃しかないため、航空に搭載できる機関銃が登場していないからだ。
しかしｎ＋２１３２では騎獣士といった航空戦力が存在している為、航空機銃の代わりに散弾銃が戦闘機の主武装に用いられている。

追記：秘匿性が高く確認したわけではないが、魔法に類する技術もあるらしい

●国家・文明
雲海と浮遊大地から成るｎ＋２１３２　は、いわば断絶された幾つもの小さな世界の集まりと見ることができる。
それ故か、浮遊大地ごとによって２０世紀相当の近代国家があれば、古代・中世程度の技術しか持たない国も散見された。
幾つかの国々を訪問したところ、この格差は主要となる航路上から外れている国家程その差が顕著に拡大する特徴が見られた。
雲海を渡る手段としては、飛行船などの船舶、巨鳥や翼竜といった騎獣などが広く各国で官民問わず活用されている。
また先進国といった国では軽い気体を使用する飛空船のみならず、

浮力を起こす機関を搭載した空中蒸気船、航空機などが開発・実用化されている。
以下訪れた国々で、発展国をｎ＋２１３２―１群、途上国をｎ＋２１３２―２群と分けて一部情報を下に記す

・八洲皇国
国旗　：白地と薄紅色の八弁桜
君主号：大皇
区分　：ｎ＋２１３２―２群
・千数百年の歴史を持つ島国。幾つかの島々の他、本土とする大地はその表面の大半が水面に覆われているという特徴を持ち、特に海産物の富んでいる。
・半世紀前は全土に戦火が広がる戦国の世であったが、三〇年前に終焉して以降は文治貴族と軍事貴族の合議制により安定した治世が敷かれている。
・しかし列強諸国の侵攻による周辺国の植民地化、保守派と改革派の政治的対立など近い将来激動の時代を迎えることが予想される。
・海鮮料理がとても美味かった。

・グラートノスク帝国
国旗　：黒地に双頭の竜
君主号：皇帝
区分　：ｎ＋２１３２―１群
・雪と凍土に覆われた大陸の大国。専制君主制が敷かれ、空中戦艦をはじめとする強力な軍事力と国土は彼の国民の高い誇りの源となっている。
・しかし農耕の難しい不毛な地が多い上、大陸自体の沈下と崩壊現象が年々ゆっくりとしかし確実に進行しており、新たな新天地を求める軍事行動による衝突が頻発している。
・寒い中食べるスープは格別だ

・ギルド連合体
国旗：ギルド紋章
首相：総帥
区分：ｎ＋２１３２―１群
・複数のギルドが寄り集まったことで構成された都市国家群。金と契約が絶対的なルールとして刻まれている。
・各国に支部を持つ冒険者ギルドの本部が存在しており、富や名声を求める冒険者が集うことで多種多様な人種を見ることが出来る。
・冒険者ギルドによる航路開拓・未開地探索の他、傭兵ギルドによる血の輸出も各国に行っており、武装中立の立場を確立している。

・空賊
首領：族長
区分：ｎ＋２１３２―２群
・空賊という俗称から追い？ぎや強奪を行う盗賊集団のイメージを受けるが、その実態は渡り鳥に乗って雲海を渡る遊牧民やジプシーに近い。
・過去には彼らを介した交易が行われ、その卓越した騎獣技術を活かした軍事力で各国に多大な影響を与えてきた。
・現在は銃火器や飛空船、航空機の発展によりその影響力は下火になりつつある。しかし、彼らしか知りえない飛行路など、その存在は無視しできないだろう。

追記：主要航路から外れているにも関わらず現代並みかそれ以上の技術を有する国が確認できた。
よってこの例外的な成長が見られた国をｎ＋２１３２―３群と区分する。

・ノースネル島
国名：不明
国旗：不明
首領：不明
区分：ｎ＋２１３２―３群（推定
・強酸雨と瘴気により近づくのが困難な島。（公害だろうか？
・最接近した船乗りの撮られた写真には霞の中に建つ幾つもの高層ビルらしきものが映っており、かなりの技術文明国だと予想されている。

●遺跡
各地の浮遊大地に点在して見られる遺構。ｎ＋２１３２―３群が発生した要因として考えられる。
侵入防止の罠や凶暴な幻獣の住処になっていたりする場合がある。
幾つかの遺跡を訊ねた所「アルスヘイム」という共通した言葉が散見され、もとは一つの巨大な大陸を支配した超文明だったかもしれない。

記録：n＋2132―1

記録開始
そこは蒼空と純白の海原が広がっていた。
眼下に広がる海面は純白の綿のようで、空の蒼と交わるその果てに延々の水平線を描いている。
轟々と耳元で吹く風は冷たく頬を叩き、この乳白色に染まった霞の海原をかき回すかの如くに吹きすさび、うねりを伴う潮流をその海原に起こして過ぎ去っていく。
この白い海原の波間に見える黒い影。
青々とした草木が生い茂る大小のそれは、波打つ雲海の中に泰然と浮かぶこの世界の陸地であった。
ここは雲海と浮島の世界。
全ての命は皆、この霞に漂う浮島という揺り籠の上で日々の営みを築いている。

「あと少しで船に着きますぜ旦那」
そんな眼下に広がる光景を眺めていると、気さくげに語りかける壮年の男声が耳に入る。
振り向くと、そこには黒茶色の飛行服に航空眼鏡のいで立ちの男。
私が跨るこの巨鳥の手綱を握る彼は、熟練さを感じる捌きで巧みに乗騎を操って見せている。
「騎獣士」
彼の様に、騎獣を駆って雲海を渡るもの達を、この世界ではそう呼ぶのだそうだ。

「それにしても旦那、なんであないなとこに居ったんですかい？」
愛想笑いを浮かべつつ、壮年の騎獣士は怪訝そうに口を開いた。
彼が言っているのは人っ子1人いない無人島、私がこの世界に初めて降り立った場所である。

彼曰く、この世界の雲海は底なし沼のように広がっているとのこと。
そんな環境の為、この世界で各浮遊大地間を移動するには彼らのような騎獣士や飛行船を使う必要がある。
ただ、それを知らなかった私は降り立った浮島から降りようとした。
眼下に広がる雲海から、今いるのは高山の上だと判断したからだ。
今から思えば、生えていた草木は平地にあるものだったし、森林限界を迎えている様子も無かった。
実に安易な判断だったと思う。
お陰様で私は、彼に拾ってもらうまで強風の中、断崖絶壁にしがみつく羽目にあった。

「いや～ホント、最初見たときはぶったまげましたよ。
あんな所になんで人が?!ってね」
いやはや全く、面目ない限りである。
たまたま近くにいた彼がいなければどうなっていたのか。
「雲海に入る直前でよかったですわ。
あれ以上潜っていたら、雲海に捕まってこっちも帰って来れなくなりますからな。」
…どうやらだいぶ危険な真似をさせてしまったようだ。
今後は迂闊な真似は避けるようにしよう。

「――――おお、やっと船が見えやしたぜ。」
壮年の騎獣士が朗らかに口を開く。
それに合わせる様に彼の騎獣は、それまで続けていた飛行を緩めるとその体を傾けてゆったりと旋回軌道を始める。
どうやら目的の母船とやらに着いたらしい。
そういえばだが、雲海に浮かぶ様な船というと飛行船だと思うが、どのようにしてこの騎獣を降ろすのか。

まさか空母のように気嚢に甲板でも備えたのか、と思いつつ旋回軌道の中心点を見やる。
まず目についたのは黒い煙。船体中央に設けられた煙突から吐き出されるそれは、風に靡いて白い海原に良く映えている。
煙突に並ぶように立つ二本の帆柱は、いわきの煙を沸き立たせる蒸気機関に任せるようにその帆を畳んでいた。
これら帆柱や煙突を備えた船体は、膨らみがあるその腹部に舵取りの為の羽が取り付けられている。
そこに、私が想像していた船の姿はなくーーー要するに水面に浮かんでいるはずの汽船がそのままに浮かんでいた。
「そんじゃお客人、あの船のケツに降りますんで、確り捕まってください。」
見ると確かに船尾から突き出る様に甲板が伸びている。
ただ一言いいだろうか。

どう見ても近代レベルの技術で、どうやって浮かんでいるんだ？
そんな疑問が浮かぶ横でふとみれば、羽を生やした魚が悠々と雲海を泳いでいた。

記録終了